

論文

功利主義思想とシスモンディ経済学

—— 経済危機回避策の思想基盤 ——

中 宮 光 隆

要 旨

シスモンディ経済学における再生産論は、ベースとして理論的に展開される均衡論と、現状分析を加味した不均衡論（恐慌論）の二重構造からなっている。彼の経済学を「過少消費説」と特徴づける根拠として引き合いに出されるシスモンディの再生産論＝「円環運動」は、実は均衡論として論述されたものであり、彼の恐慌論ではない。彼の恐慌論は、均衡論をベースにしたうえで、それを破壊する不均衡論として展開される。その不均衡論（恐慌論）は、生産（供給）面からの、市場の状況を顧慮しない生産者（諸資本）間競争の論理と、消費（需要）の面からの、人々の欲求が有限であることと分配の不平等による社会総体としての消費（需要）量の狭小さの論理の両面から展開され、しかも何らかの人為的な対応策がとられなければ不均衡は必然的に生じる、との論理で構成されている。

したがって、シスモンディは、恐慌の回避策＝順調な再生産の実現のために、生産者間の競争を制限する政府の役割と分配の平等化を主張する。

問題は、彼のこのような論理の背後にある思想はいかなるもので、それを彼はどこから獲得したかである。その思想は、「効用の原理」＝功利主義である。そして彼はその思想を、ジュネーヴで活躍した思想家たちから得た。そのひとり自然科学者であり思想家でもあったピエール・プレヴォであり、さらに18世紀末にジュネーヴで創刊された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者や協力者たちであった。これらの人々は、明確な功利主義思想に基づいて出版と啓蒙の活動を行っていた。

シスモンディが、恐慌論のひとつの基軸的論理として狭小な消費とその原因としての分配の不平等に着目し、政府の役割とともに平等な分配こそが経済危機の克服策と考えた思想は、まさに若きシスモンディと交流があったこれらの人々からの影響によるものであった。

はじめに

シスモンディ（Jean-Charles-Léonard Simonde de Sismondi, 1773-1842）の経済学は、単なる「過少消費説」ではないし、過去の経済体制に復帰することを期待する「ロマン主義」でもないことは、すでに拙著（中宮、1997年）で指摘した。シスモンディは『経済学新原理』（*Nouveaux Principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec population*, 2vols.）（1819, 2e éd. augmentée, 1827）（以下、*N.P.*と略記）第2編第6章で、

不均衡が生じない、したがって経済危機に至らない順調な再生産過程の進行を「円環運動」として示している。しかもこの「円環運動」においては、「拡大し螺旋状に変わりうる」(*N.P. t.1, p.119.*)として、拡大再生産も可能であるとされている。ところが、ここでのシスモンディの表現が「国民所得は国民支出を規制しなければならず、国民支出は生産の総体を消費ファンドに吸収しなければならない」(*N.P. p.112*)とされていて、この「消費ファンド」を「国民所得」と結びつけて理解されるために「消費」は個人的消費（最終的消費）と捉えられ、生産的消費（不変資本の投資対象）が無視されているとの解釈を許す余地を与えてしまった。これが、シスモンディ経済学を「過少消費説」と特徴づけるひとつの根拠であると言える。

しかしながら前掲拙著でも指摘したように（中宮、1997. pp.61-74）、引用した箇所シスモンディの意図は、消費は所得以上であっても以下であってもいけないという点にある。消費が所得額に達しない場合には生産された商品が販売されない（価値実現しない）ことは自明である。では、消費が所得以上となるのはどのような状況であろうか。それは過剰な消費によって資本が蚕食される場合であると、シスモンディは考えている。この結果は当然、次期の生産を縮小させる。当該箇所シスモンディが強調しているのは、消費が所得以上である場合であって、消費が所得額に達しない場合ではない。したがって、「円環運動」を、過少な消費による再生産過程の攪乱を示すシスモンディの論理と理解するのは誤読と言わざるを得ないし、生産的消費（不変資本の投資対象）が不問に付されているわけでもない。「円環運動」は順調な再生産過程を示すものである。

それだけではない。上述のように、「円環運動」は、毎年、同規模で繰り返されるばかりではなく、「拡大し螺旋状に変わりうる」として、シスモンディは拡大再生産を認めている。所得（いわば資本家の）は個人的消費としてすべて購買（消費）に向かわなければならないわけではない。「富者は、自分の所得のうちからなにがしかを削って、それを資本に、あるいは彼らが貧者に与える賃金に、追加していた」(*N.P. p.112*)との記述に見られるように、資本家の所得となる利潤が資本に転化されて蓄積されることが可能であるとシスモンディは考えている。彼は、個人的消費と蓄積を、いずれも容易に一方から他方に転換しうると想定している¹⁾。

それにもかかわらずシスモンディは周知のように、1815年の恐慌を経験してアダム・スミス経済学の「修正」が必要であると認識するようになった。その成果としての『経済学新原理』の出版であるが、後世の人々がシスモンディの「修正」点の論拠が上述の「円環運動」の論理にあると誤解して、シスモンディ経済学を「過少消費説」と特徴づけることになった。

1) シスモンディは、このような経過の具体例として、農業者における小麦の再生産過程を例として示している。Sismondi, *N.P. t.1, pp.95-96.* 拙著（1997年）第3章、pp.75-76 参照。

それではシスモンディの真意、アダム・スミス経済学の「修正」点の真の論理はどのようなものなのか。本稿はまずこの点を再確認したうえで、さらにその論理はいかなる思想に基づいているのか、シスモンディ経済学の基礎となる思想は何かを明らかにすることが目的である。結論を先取りするならば、それは功利主義あるいは効用の原理である。シスモンディが「消費」を重視するのは、過少消費説に陥っているからではなく、功利主義思想が彼の経済学の根底にあるからである。

I シスモンディ恐慌論の真髄

シスモンディの恐慌論は、彼の経済学大系的一部分でしかない。前述のように、彼は『経済学新原理』のなかで、順調な再生産過程を示す論理としての「円環運動」を展開している。その意味で彼の再生産論は、二重構造である。そのうち、基本となる「円環運動」はいわば平均的・理想的な再生産過程を示すものであり、したがって抽象化された理論である。これはスミス経済学の理論を継承したものと言える。しかしながら現実の経済の動きは、そのような順調な再生産過程の繰り返しではなく、再生産過程の混乱＝恐慌が発生している。これはスミス経済学では説明できないものである。そこでスミス経済学の「修正」が必要であるとシスモンディは考えた。それがシスモンディの恐慌論であり、二重構造をなす彼の再生産論の上層部分であり、再生産論の抽象的・平均的な基層部分ではない、現実の経済の動きを理論的に説明する部分である。

では、再生産論の上層部分、シスモンディの恐慌論はどのような論理なのだろうか。彼は市場における不均衡状態を、単に限定された消費（過少消費）から説明しているのではなく、需要の側面と供給の側面の両面から展開すると同時に、両側面が相互に関係し合う論理も示している。このうち需要の側面を一言でまとめるならば、その大きさ、あるいは消費の大きさには限界があるということであるが、そこには3つの論点がある。第1に生産は最終的に個人的消費に依存するという再生産構造把握論であり、第2に所得による再生産規模決定論であり、第3に、前二者の根底にある「欲求」論である。他方、市場の供給面にも三つの論理がある。第1に市場の大きさを供給者（あるいは資本）は事前に把握できないという、いわば生産の無政府性論、第2に限られた市場をめぐって不可避となる生産者（資本）間の競争論、第3にそれを加速する信用（信用制度）論である。このようにシスモンディがその経済学体系の上層部分に置く恐慌論は、需要面と供給面の両面から展開されているが、従来、過少消費説として特徴づけられた論理は需要面の論理のみ強調されていた。そうではなく、

彼の恐慌論は、需要面と供給面の両面から展開されているのである。

シスモンディは、需要（消費）の場合と同様に生産（供給）を論じる場合も、孤立人から出発する。孤立人は自分自身の欲求を満たすためにのみ労働すれば良かったし、その量は自分自身の消費量であるから、当然その大きさ（量）は把握できる（この「欲求」を需要の根底におく論理が一貫していることが、シスモンディ経済学の特徴のひとつである。詳細は後述）。しかし商業社会になって、生産者は自分自身が消費するものを生産するのではなく、未知の他人の消費のためのものを生産することになった。消費対象物の社会的必要量は、市場で初めて知ることができるようになった。

経済面から捉える社会の発展過程を「孤立人」と「商業社会」に分割して比較考量する考え方は、スミスの「初期未開社会」と「進歩した社会」ないしは「文明社会」との区分に似ているが、シスモンディの場合ふたつの発展過程を「欲求」の満たされ方、換言すれば消費に対する生産の関わり方の違いで区別している点で、スミスと大きく異なっている。このことは、シスモンディの社会総体の消費総量を欲求との関連で捉えている論理と通じるものである。（この点は本稿後半で重要な視点となる。）

シスモンディは市場を構成する要素として、消費者の数、彼らの嗜好、彼らの消費の大きさ、所得の大きさの4つを挙げたうえで、これら4要素はたがいに独立して変動する、と指摘する。注目すべき点のひとつは、4要素のうち初めの3点は、シスモンディが社会全体の消費の大きさを「欲求」（あるいは「使用価値」）の視点から捉えていることを示唆していることである²⁾。それとともに、この論理には、「市場」における需要の拡大、社会総体の需要拡大は、消費者の消費量によって規定されているという点、換言すれば生産手段生産部門の自立的な生産拡大によってどこまでも拡大再生産が可能であるといった論理の否定が含意されている。

彼は、これら4要素が量的に減少することは十分あり得ることであり、その際問題は、これらの変動を生産者が事前に予測することは不可能だと考えていることである³⁾。

シスモンディによれば、市場の需要量が生産者による商品の生産開始以前にあらかじめ把握することは不可能であって、生産者が市場の大きさ（需要に比較しての供給の過多あるいは過少）を知るのは、市場価格においてである。彼は市場価格を「ただひとつの観測」と表現して、生産者が市場の需給状態を把握する唯一の現象と理解している。彼は商品価格を「生

2) この点は、本稿の主たる論旨であるシスモンディ経済学の根底にある思想としての効用の原理に関わるが、この点は本稿V節で改めて論じる。

3) 「この市場の変動を正確に認識し、計算することは難しい。各生産者には、彼と競争して販売している他の商人、つまり彼の競争者の数や資力が十分に分かっていないために、彼にとって曖昧さはますます大きくなる」(N.P. p.330.)。

産者の価格」と「購買者の価格」というふたつの異なる要素から説明している「生産者の価格」とはマルクスの「生産価格」と同義であり、それは市場の需給とは関わりのない価格、商品の生産過程ですでに決定され、商品が流通過程（市場）に持ち込まれた時点で与件となる価格である。他方、「購買者の価格」は、何か特定の要素（費用等といった）から構成されるのではなく、市場における生産者間の価格競争を前提として、一定の需要量を持つ購買者が支払いを許諾する価格とシスモンディは理解している。したがって、市場で「生産者の価格」が与件であるのに対して、「購買者の価格」は市場の需給によって変化することになる。言い換えれば、「購買者の価格」は市場価格であると言える。このように「生産者の価格」と「購買者の価格」はたがいに異なるものであり、全く無関係である。

したがって、「生産者の価格」に対して「購買者の価格」、すなわち生産価格に対して市場価格がどうなるかは、予見不可能である。後者が前者より高額ならば、生産者は平均的な利得（利潤）を上回る所得を得ることができ、逆の場合は損失が発生する。生産者は結果的に（生産が終了し、生産物が市場に出された時点で）市場の状況を把握することができ、生産量の増減を決めることができるが、それは翌年度の生産量に反映させることができるに過ぎない。今年度の生産物については、生産者がその生産に要した「前払い」や平均的な「利得」が得られなくても、そのときの市場価格（「購買者の価格」）で販売せざるを得ない。それだけではない。シスモンディは、生産者は市場価格を基準にして次年度以降の生産量を決定するのであるが、ここでも多数の生産者がたがいに無関係に、他の生産者の意思や状況を知らないまま市場価格の動向のみで翌年の生産量を決定するから、つねに過剰な反応につながる、と考えている。

今年度の生産量が需要量を超えた場合、次年度には生産量を縮小しなければならないが、これは容易ではなく、「生産を必ず縮小させる過剰は、期待される効果を生む前に、長い過酷な苦境を政体全体に惹き起こす」（*N.P.*, p.332.）。その根拠としてシスモンディは、3点挙げている。第1に労働力移動が困難であることである。その理由は、ある特定の労働を行うのに必要な熟練は労働者によって、長期間の、しかも修行に必要な多額の費用を費やして獲得されたものだからである。むしろ労働者は、賃金が低下してたとえ生活に必要な最低限を割り込んでも、同じ労働を継続するであろう。その場合、労働者は賃金の減少に対して生活を維持するために、より多くの労働（労働時間の延長、休日の返上、余暇の削減等）によって収入を確保しようとするだろう。その結果、労働者数に変化がなくても遙かに多量の生産物が生産されることになる。第2に機械等の生産設備についても、特定の用途を持つ機械や巨費を投じて建設された広大な建物を他に転用することは不可能であるので、仮に採算を度外視しても操業を継続し生産し続けるだろう。さらに第3に、生産者（資本）自身もみずか

らの生活を維持するために、その企業とそこでの生産を必要としている。このようにシスモンディは、たとえ「購買者の価格」が「生産者の価格」を下回っても、生産量を減少させることはできないし、むしろ逆に増加させることになる、と主張する。このような状況はひとつの（特定の）生産者（資本）にのみ生じるのではなく、同一生産部門の他の生産者（資本）も、あるいは社会全体についても同様に発生する。その結果は、諸生産者（諸資本）の市場をめぐる競争の激化を生じさせることになる⁴⁾。

シスモンディには、経済危機（恐慌）を説明するにあたって、諸資本の競争の論理とともにもうひとつ重要な論理があり、両者は密接につながっている。それは、信用（信用制度）である。この点を明らかにするために、まず「資本過剰」の認識を確認する必要がある。

シスモンディは上述のように、市場をめぐる諸生産者（諸資本）間の競争が過剰生産を惹き起こすと主張しているが、それを生じさせる要因として、資本過剰を指摘している。彼は、生産物の販路がつねに確保され、生産過剰の状態にならないためには、労働量（生産量）は需要量に応じて限定されなければならないのに、生産者は社会の総需要量を見放し（上述のように需要量の把握は生産完了後の市場において初めて可能であるから）して、彼の「自由にしうる資本量」に比例して生産を行う⁵⁾。さらにシスモンディは、「大商人は、市場に取引がほとんどないからといって努力を怠るのではなく、それとは逆に、彼にとっては取引を全部自分でおさえようと一層熱心に働く」（*N.P.* p.341.）と指摘して、生産者が需要量ではなく投下可能な資本量に比例して生産を行う背景に、諸生産者（諸資本）間の競争があると指摘している。

ところで、この「自由にしうる資本量」は、単に生産者（資本）が所有する資本だけでなく、資本の所有者から生産者に貸付等の形態で提供される資本、すなわち貸付可能な貨幣資本（より一般的に「利子生み資本」）も視野に入れられているのである。この貸付可能資本（利子生み資本）が、再生産過程における生産と消費の一致・不一致の関係に如何に関わるかが

4) シスモンディの理論は、資本の部門間移動が不可能であることを前提にしている。これに対してリカードウは、それを可能と考え、たとえ一部の生産部門で需要と供給の不均衡が生じても、その生産部門から他の部門に資本が移動して生産過程全体としては均衡を維持すると考えている。しかし、シスモンディの理論を少し敷衍するならば、需要と供給の不均衡（供給が需要を上回る状態）が発生すれば当然、資本価値の毀損が発生し、そのことは、それ以前の利益水準を維持できないことになり、たとえば他の生産部門に資本が移動したとしても、資本価値の毀損による生産の縮小、利益量の減少は避けられないことになる。シスモンディは、リカードウを批判する際、このような論理を想定していたのではないかと考えられる。

5) 「社会は、販路が普遍的であり、またいかなる生産者も苦境に落ち込んだままということがないように、労働が需要に規制されることをいつも望まなければならない。しかし、各生産者は、総需要に規制されることなく、彼の活動を彼が自由にしうる資本量に比例させる。彼が考えるのは、いつも生産手段のことであって、消費手段のことではない。」（*ibid.*, p.341.）

論じられ、それによって利子率が決定される、と以下のように述べられている。

「資本が長期にわたって欲求を下回るとき、この資本が養うべき人口はまだ存在していないのであるから、その結果として苦境が生じるということにはなりにくい。……しかしながらすでに存在している不十分な資本は、それに比例して巨額の所得をもたらす。……これが自由なアメリカの状態である。そこでは資本はすでに巨額に上っているが、それでも欲求や需要を著しく下回っている。これらの資本は、社会にとって有用な多くの仕事、現在の人口よりも遙かに多くの人口を生活させることができる多くの仕事を、自由に行わせる。……生存する人々は、賃金、商業利潤、あるいは資本の利子として、これら資本が生み落とす所得のなかから豊富な分け前を獲得しているのである。

……

逆に資本が消費欲求を上回っているとき、この過剰の痛ましい第一の結果は、資本の使い道を相互に争い合うその所有者が、結局はより少ない賃料（ロワイエ）で満足することである。利子率は低下し商業の富のこの基本的な部分を所有するものの所得は低減し、彼らの愉楽は減少する」（*N.P.* pp.318-20.）

ここでみられるように、資本が過剰かそうでないかは「消費欲求を上回っている」かどうかによって決まり、資本過剰の場合には資本所有者が「資本の使い道を相互に争い合う」、すなわち貨幣資本家（利子生み資本家）間の競争が避けられず、利子率が低減し、貨幣資本家（利子生み資本家）の所得が低下する、と指摘されている。

さらにシスモンディは、資本過剰の影響は貨幣資本家（利子生み資本家）の所得を減少させるだけでなく、生産者（資本）間、いわば産業資本家間の競争も激化させ、彼らの所得をも減少させると指摘している。

「そればかりではない。その時以来、企業者は、彼らが上に立って行う事業を、もはや彼らが満たさなければならない社会の欲求に合わせるのではなく、彼らが自由にできる資本に合わせ、消費しうる以上に製品を作る。そして顧客を奪い合い、売するためにはより少ない利潤で満足することに同意する。商業利潤の低下は、商業で生活してきたあらゆるものの所得を減少させ、彼らの愉楽を少なくする。」（*N.P.*, p.320.）

さらに、「欲求を上回った資本」は「労働者にも同じ影響を与え」、彼らの「所得、愉楽、幸福」（*ibid.*, pp.320-21.）を減少させる。結局「資本過剰」は、生産者（資本）、貨幣資本家（利子生み資本家）、労働者のいずれも所得の減退を発生させ、再生産の攪乱を惹き起こす。

ここでみられるようにシスモンディは、生産者（資本）すなわち産業資本家と貨幣資本家がそれぞれ競争しあっているだけでなく、両者の連携が資本過剰を増幅し、市場をめぐる競争が激化することを強調している。

さらにシスモンディは、晩年の『経済学研究』(*Étude sur l'économie politique*, tome I et II, 1837-38) のなかで、信用制度が資本過剰を加速させることについて論じている。その中心的概念が「想像的資本」(le capital imaginaire) である。典型的には規則的に支払われる利子の背後に、その利子を利子率で割って得られた資本が存在するとみなす、いわゆる「資本還元」の結果得られる資本額を、彼は「想像的資本」と呼んでいる。さらに、債権債務関係によって生じた金融資産・金融負債であるが、それ自体が市場を通じるなどして売買されることによって額面とは異なる「市場価格」で取引され、その結果、当初の債権債務額とは異なる金額の「資産」(あるいは資本) として理解されてしまう。これらが金融市場で成立する取引金額と、その背後にある元々の実物資産の金額とは全く関係がない。それだけではなく、膨張した「想像的資本」が貸付可能資本となって、再生産過程における資本過剰を加速させる条件を作ることになる。シスモンディはこのことを十分理解し、警戒していたために、「想像的資本」を否定的に取り扱っている。

ここまでみてきたように、シスモンディ恐慌論は単に消費(需要)の側面からのみ展開されたものではないし、したがって単純に過少消費説と特徴づけることはできない。そもそも彼の再生産論は均衡的な再生産過程論を基礎に持ち、恐慌論はその上層部分に過ぎない⁶⁾。そして恐慌論も、単に消費(需要)の側面に関する論理のみで構成されているのではなく、生産(供給)の側面(生産者による市場規模の把握困難、生産者間の競争、供給過剰の場合の所得の減少、過剰資本、信用制度とその影響等)の論理も展開されている。また、ここでもみられるように、生産(供給)の側面から生じる所得の減少は、当然消費(需要)の減少をもたらすものであるから、両者の関連についてもシスモンディは認識しているのである。

それでは、恐慌の回避策についてシスモンディはどのような論理を展開しているのだろうか。またそれはいかなる思想から生まれているのだろうか。この課題を解く前に、その前提となるシスモンディの交友関係を瞥見しておこう。

II シスモンディとマッキントシュ

ジュネーヴで勃発した革命から逃れるために一家で移り住んだトスカナのペーシャでの6年間に及ぶ生活の後、シスモンディは1800年、家族をペーシャに残してひとりジュネーヴに戻った。執筆した『トスカナ農業概観』(*Tableau de l'agriculture de la Toscane*, Genève,

6) この上層部分がスミス経済学の「修正」部分とシスモンディは認識しているのだろう。

1801)の刊行がひとつの目的であった。この本は、当時ジュネーヴで最も有名な出版社のひとつであったパシュー (Pachoud) から出版された。この出版によってシスモンディは農学者たちに認められ、その年のうちに技術協会や農業協会で彼らと仕事をともにすることを求められた。さらに農業経営を経験したという経歴を評価されたシスモンディは、レマン県の商業・技術・農業委員会の書記や、後にはレマン県商業会議所の書記を務めた⁷⁾。

この頃からシスモンディは、コペ (ジュネーヴの東に位置するレマン湖畔の小さな村) に建つスタール夫人 (M^{me} de Staël) (Anne Louise Germaine de Staël, 1766-1817) のサロンに出入りするようになった。そしてこのサロンでの会話が、若きシスモンディのその後の精神的営為に大きな影響を与えた。シスモンディはその後も永くスタール夫人との親交を続け、多数の書簡が知られている。サリスが指摘するように、「シスモンディの変革において、スタール夫人の厚意は決定的だった」(Salis, p.48.)。このサロンには、高度な教育を受けた人々が集まっていたが、高等教育を受けていなかったシスモンディは、当初、このサロンに出入りしていたミュラー (Jean de Müller, 1752-1809) やバンジャマン・コンスタン (Henri-Benjamin Constant de Rebecque, 1767-1830)、それにシュレーゲル (August Wilhelm von Schlegel, 1767-1845) といった人々の会話に驚き、そこで口をはさむことなどとてもできない状態であったという。スタール夫人のサロンのメンバーのひとりであったボンシュテッテン (Charles Victor de Bonstetten, 1745-1832) は、「シスモンディ君は、完全に茫然自失になっている。すべてが、救いがたい自分の無知によってそのような状態になっているように思える、と昨日私に告白していた」(Salis, pp.47-48.) と述べている。そこでシスモンディは一念発起し、歴史研究や文学研究に没頭した。その成果が彼の歴史書であり、文芸批評である。なかでも彼の著作『南欧文学論』(*De la littérature du Midi de Europe*, Paris 1813, 4 vols.) は、スタール夫人から受けた影響の産物であるとされる。

スタール夫人は、1777年にルイ16世のもとで財務長官となったネッケル (Jacques Necker, 1732-1804) の娘である。しかしスタール夫人自身は、バンジャマン・コンスタンとともに自由主義共和派に位置づけられている⁸⁾。夫人のサロンに集った人々は、多彩であったといわれるが、スタール夫人の自由主義思想、自由な制度は民族の徳と繁栄をもたらし、専制は腐敗と破滅に導くとの思想にシスモンディも共感し、それをサロンに集う人々と共有することになったのである。

サロンの参加者のひとりに、サー・ジェームズ・マッキントシュ (Sir James Mackintosh,

7) Jean-R. De Salis, *Sismondi 1773-1842*, t. I, *La vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe*, Genève, 1973. (Réimpression des éditions de Paris, 1932, p.43.)

8) ナポレオン、コンスタン、シスモンディの関係については、小池渺 1993-94 参照。

1765-1832) がいる。マッキントッシュ家はスコットランド高地地方でも有力な人々と姻戚関係にあったが、彼の父が戦乱で負傷して一家の収入が軍属としての給料しかなかったために、彼の幼い頃のマッキントッシュ家は貧乏であったという。彼は 1780 年から 84 年までキングス・カレッジで学んだのち、エディンバラ大学に進学して医学を学んだ。ここで彼は、クラスのリーダー役を務めたり、文学や科学を討究する「思弁協会 (The Speculative Society)」から優秀賞を授与されたりしたという。この大学で彼は、デュガルト・ステュアート (Dugald Stewart, 1753-1828) はじめ、のちに著名な裁判官や歴史家等になる生涯の友人たちに巡り会った。そのなかにはバンジャマン・コンスタンやスタール夫人がいた。

1788 年春、マッキントッシュは医学を学ぶためにロンドンに移り住むが、指導教官の死などで医学を放棄し、次第にジャーナリストに転向していく。議会改革を主張していたグループの人々とのあいだで親密な交流をしていたマッキントッシュは、このときすでにウィッグを擁護する立場にいたとされる⁹⁾。

マッキントッシュは、1791 年にフランス革命を擁護する立場から *Vindiciae Gallicae: A Defence of the French Revolution and its English admirers against the accusations of the Right Hon. Edmund Burke, including some strictures on the late production of Mons. de Calonne.* を出版した。この著作は、ウィッグのリーダーたちから賞賛を受けるとともに、「人民の友協会 (The Association of the Friend of the People)」の書記に勧誘されるきっかけを与えることになった。またマッキントッシュは、翌 1792 年に出版したピット (Pitt) 首相を攻撃する著作 *A Letter to the Right Honourable William Pitt* によってみずからの議会改革者としての立場を示すことになった。

しかし、この年の秋以降、フランスでは虐殺など凶暴な事件の発生やルイ 16 世の処刑、さらに英仏間の戦争の勃発によって、マッキントッシュは次第にその立場を転換せざるを得なくなった。1799 年に出版された *A Discourse on the Law of Nature and of Nations* は、フランス革命に関する彼の見解を修正して *Vindiciae Gallicae* の過ちを認めて、周囲の人々を安堵させたといわれる¹⁰⁾。これには、有力な議員のサロンとなった「キング・オブ・クラブズ (the King of Clubs)」の設立に加わったことが影響しているのかもしれない。また、その 2 年前 (1796 年) にマッキントッシュは、*Vindiciae Gallicae* で攻撃の対象にしたバーク (Burke) を訪問している。そして 1800 年に至るとマッキントッシュは、公然とフランス革命を非難するようになったのであった。1802 年に彼はパリでナポレオンのレセプションに

9) Patrick O'Leary, *Sir James Mackintosh: the Whig Cicero*, 1989, p.18. Donald Winch ed., *Vindiciae Gallicae and Other Writings on the French Revolution*, 2006, p.ix. を参考にした。

10) Winch, 2006, p.xv.

出席し、彼に面会しているが、必ずしもこの時点でナポレオンを評価していたわけではなかったようである。

1803年12月、マッキントッシュはナイトの爵位を得、翌年2月にボンベイの裁判所判事に赴任した。約8年間の任務を終え、1811年に判事の職を辞してイングランドへの帰国の途についた彼は、翌年、トーリーの首相から政府顧問への就任の申し出を受けるもののこれを断った。逆に彼は、1813年、ウィッグの有力なスポークスマンを引き受けるとともに、エディンバラ・レビュー誌の記者（*Edinburgh Reviewer*）となった。この頃彼は、スタール夫人との親交を再開している。

ところで、シスモンディが1813年に刊行した『南欧文学論（*Littérature du Midi*）』の書評を、マッキントッシュはすでに同年10月に *Edinburgh Review* 誌に寄稿している¹¹⁾。この書評の中でマッキントッシュは、シスモンディの著書をスタール夫人の著作の精神に影響された偉大な功績と褒め称えたうえで、「哲学的思索に新たな分野が開けつつあることを確信」（*Salis*, 1973, p.189.）するとして、シスモンディを高く評価し、期待している。

またマッキントッシュは、1821年に同じ *Edinburgh Review* 誌にシスモンディの『フランス史』（*Histoire des Français*）の書評を寄稿している。そしてここでもマッキントッシュはシスモンディの著作を高く評価している¹²⁾。

マッキントッシュ自身、歴史には造詣が深かったし、みずから歴史的資料の発掘努力を惜しまなかったことは、前述のとおりである。この点でマッキントッシュの同じ書評にある以下の部分は、彼の歴史家としての姿勢が語られていて興味深い。

「フランスにおける歴史能力の低下ないし欠如の他の原因は、おそらく、最近の著名な歴史家たちのあいだに調査の習慣が欠如していることに見出されるべきであろう。歴史の才能は、語り部のオリジナルの研究と諸事実の状況の詳細に関する批判的考察によって、育まれる。無能な憶測やこれ見よがしの装飾は、歴史の廉直さからみれば惨めなすり替えであるし、彼らの地位は、最もうまくいったとしても、人間の諸事情に対する厳密で深い関心を消滅させてしまうふざけや冗談によって、一層悪化しているのである。歴史家は道化師でもなければ

11) *Salis, op. cit.*, p.200 による。

12) この書評の冒頭で彼は、シスモンディの『イタリア共和国史』に対する Hallam という「ある権威ある歴史家」の評価を援用しつつ、以下のように述べている。

「いまわれわれの前にある歴史書の著者は、われわれの読者にはすでによく知られている。当面の非常に困難な仕事のための彼の才能、彼の信念、そして彼の特異な能力は、ヨーロッパ諸国の歴史に関する評価については疑いなく権威がある、ある著者の次の一節以上にうまく述べることはできない。『シスモンディ氏の『イタリア共和国史』の出版は、中世ヨーロッパに関する最も興味深い事柄に、多くの点で光明の光を投げかけてきた。私はこの著者の学識と勤勉について、私自身の研究が許すかぎりで証言することを幸せに思う』」。（*Edinburgh Review*, 1821 July, p.488. 拙稿，2006 参照。）

ば皮肉屋でもない。人々を冷笑したりあざ笑ったりすること、あるいは人間性を貶めることが、歴史家の仕事ではない。歴史が、歴史家の情熱をもって連帯感を生み出し、歴史家の性格と行動を思い描く喜びを喚起するのは、人間の尊厳と研究の重要性を擁護することによってである」(*Edinburgh Review*, 1821, p.491.)¹³⁾。

さらにマッキントッシュは、シスモンディによるカール大帝（シャルルマーニュ Charlemagne）に関する叙述を引き合いに出し、それを絶賛している。

「この著作でシャルルマーニュの歴史は、われわれがいままでに読んだ中で比類なく最高のものである。説話はオリジナル史料によって、完全かつ正確であり、しばしば躍動的である。諸事件が明瞭な順序で配置されており、権力者たちが批判的な判断をもって考察されている。好奇心と探求心は、いたるところ、適切で重要な主題に向けられている。言葉は自然で生き生きとしている。叙述は教育的であると同時に、興味深く、おもしろい。そしてもしわれわれが、9世紀初めの世界の状態に関する最良の説明を指摘しようと思ったら、迷うことなくシスモンディ氏のシャルルマーニュ氏の歴史の名を挙げるべきであろう」(*ibid.*, pp.504-505)

この引用文では、「連帯感」とか「人間の尊厳」や「(歴史) 研究の重要性」を擁護するマッキントッシュの思想が明示されている。彼が「第3世代の啓蒙思想家」と評されるゆえんを垣間見ることができるが、ここでは特に「人間の尊厳」が指摘されている点に注目しておきたい。ここでいう「人間」とは、人間一般ではなく、諸個人を指しているとみるべきであろう。言い換えれば「個人の尊厳」であり、マッキントッシュは、一人ひとりの諸個人の尊厳を大切にしているのであり、だからこそ、それ（「人間の尊厳」）の「研究の重要性」を強調しているのである。

さて、1814年にマッキントッシュは、歴史的資料の収集とスタール夫人やバンジャマン・コンスタン等、戦争で交流が途絶えていた友人たちとの旧交を温めるために、大陸旅行を行った。彼はこの旅行中、ジュネーヴにも赴き、コペにあるスタール夫人のサロンを訪れている。ここでマッキントッシュがシスモンディに面会していることが推察できるが、その後両者の

13) ここでマッキントッシュによって批判の対象にされている人物が誰であるかは不明であるが、歴史研究の意義やそれに携わる研究者の姿勢に対する彼の厳格さが良く表現されている。そのうえでマッキントッシュは、シスモンディ自身が語る彼の研究姿勢を、引用文を通じて次のように賞賛している。

「シスモンディ氏は次のように述べている。『私の仕事は、原典から始められ、そして完成された。それは私がかつて偉大な歴史家ジョン・ド・ミュラー（John de Muller）から受けたアドバイスにしたがったものである。私は現代の著述家たちの歴史を研究した。私は、歴史が著述家たちに当てた光の中でそれを描こうと努め、私が著述家たちに付き従うことに依拠するようになったのは、これら権威者たちの原典を研究し尽くし、それらから偏見のない見解を構成したのちに過ぎない。...』（序、p.xxvii）」(*ibid.*)

交流は急速に深まることになる。マッキントッシュとスタール夫人の援助によって、マッキントッシュ夫人キャサリンの実妹であるジェシー・アレン（Jessie Allen, 1777-1853）などアレン家の3人姉妹は1816年に大陸旅行をしているが、その際シスモンディは3姉妹のエスコート役を務めている。マッキントッシュの大陸旅行（前述のようにジュネーヴやコペにも立ち寄った）の2年後である。さらにその2年後の1818年、ジェシーはシスモンディとの結婚を承諾し、翌1819年4月に結婚した。したがってマッキントッシュとシスモンディは、義兄弟となる。

シスモンディは、ジェシーとの結婚式を挙げるために1819年に渡英し、その際マッキントッシュだけでなく、彼の紹介でリカードウにも面会した。これがきっかけとなってリカードウはその直前に刊行されたシスモンディの『経済学新原理』を読むことになったし、後年リカードウが大陸旅行の際にシスモンディに会い、論戦を交えたことも別稿（拙稿，2004）で指摘したとおりである。

さて、8歳年上でかつ義兄弟でもあるマッキントッシュから、シスモンディは、どのような思想的影響を受けたのだろうか。マッキントッシュがシスモンディの著作を高く評価する書評を書き、また大陸旅行でシスモンディに会っているとすれば、それは、シスモンディが40歳前後の頃のこと、コペのスタール夫人のサロンに出入りして知的衝撃と刺激を受けた数年後、シスモンディが周囲の人々との知的懸隔を埋めることに懸命だった時期である。

シスモンディが受けた影響として考えられることは、第1に、議会改革を主張する「第3世代の啓蒙思想家」マッキントッシュの批判精神、現状改革への挑戦姿勢であろう。これは、スミス経済学を「修正」するシスモンディの『経済学新原理』における経済理論として結実した。『エディンバラ百科事典』の「経済学」の項目執筆以来、経済学研究を続けたシスモンディは、1815年恐慌を契機に、スミス経済学の「修正」を確信した。現実の課題を見据え、その解決策を提示する姿勢は、マッキントッシュの議会改革に通じる面があると言える。これは、現実から出発する、あるいは現に生起している事象を重視するシスモンディの研究姿勢とともに、歴史（事実）を尊重し歴史的資料の収集に努めるマッキントッシュとシスモンディの共通点から由来するとみることも可能であろう。

第2に考えられるマッキントッシュからの影響は、「人間の尊厳」を大切にする点である。このことは、後述のシスモンディの基盤的思想である彼の効用原理思想に通じるものである。

Ⅲ ピエール・プレヴォの経済思想

シスモンディよりも22歳も年上のピエール・プレヴォは、1751年にジュネーヴで生まれた。幼い頃から神学を学んだと伝えられるが、若くして哲学・論理学・法律学を修めた。また物理学・天文学にも強い関心を持ち、同僚からの刺激もあって後にそれらの分野の著作を残すなど、幅広い学問分野で造詣が深かった。そして彼は、オランダ・リヨン・パリ・ベルリンで教職や家庭教師、それに教授職を経た後、1796年にジュネーヴで統治機関のひとつである「200人委員会」のメンバーに選出された。

熱や重力といった物理学に関する多くの著作を残したピエール・プレヴォは、けっして自然科学の分野にのみ関心を抱いていたのではない。彼は道徳哲学や経済学に関しても少なからざる著作や翻訳を発表している。パッペは、「プレヴォはジュネーヴにおける最初の国民経済学の教師であった」(Pappe, 1963. p.71.)と述べている。道徳哲学や経済学に関する著作のいくつかは、次節で取り上げる『ビブリオテーク・ブリタニク』(*Bibliothèque britannique*)誌に掲載されているし、1808年にデュガルト・スチュアートの著作の翻訳書が、さらに翌年の1809年にはT. R. マルサスの『人口論』の翻訳がそれぞれ単行本として刊行されている。さらに単行本にはなっていないが、プレヴォは『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に論文「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」(QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION)を発表しているし、本稿Ⅳ節で取り上げる1816年に刊行された『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』(*Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts*)誌第2巻に掲載されたマーセット婦人(Jane Haldimand Marcet, 1769-1858)の『経済学問答』(*Conversations on Political Economy*)からの抜粋記事もプレヴォによる翻訳と思われる。このようにピエール・プレヴォは、とりわけ19世紀にはいつてからは、社会科学に関する多くの著作を残しているのである。

カンドルは、プレヴォはD. ステュアートに、1792年にたった1回しか会っていないにもかかわらず、その後の手紙のやりとりによって両者のあいだは太い絆で結ばれていたと指摘している¹⁴⁾。プレヴォはD. ステュアートの理論を自分に取り込み、それを自著や講義に利用

14) Candolle, A.-P. de, Notice sur M. Pierre Prevost. Proesseur émérite à L'Académie de Genève. (Tire de la *Bibliothèque universelle de Genève.*), Avril 1839. p.8. 実際、両者の関係は親密であったことが、翻訳単行本にプレヴォが寄せた訳者序文からも分かる。そのなかでプレヴォは、この翻訳にはD. ステュアートは何ら手を加えていないこと、しかし「彼との文通や交友関係を持っている」ので問題はないという趣旨のことを述べている(Pierre Prevost, *ELEMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN, Par Dugald STEWART. TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST*, 1808. p.vii.)。そのうえでプレヴォは、D. ステュアートがプレヴォにこの翻訳の出版を勧めたこと、そして「一

するまでに評価していたこと、そしてまたそれらの営為を通じて道徳哲学や経済学にも造型が深かったことが分かる。

また、1809年に出版されたマルサス『人口論』（*An Essay on the Principle of Population*, 1798）翻訳書に付したプレヴォの訳者序文は短いものである。その序文のなかでプレヴォは、『人口論』の翻訳をマルサス自身から勧められたこと、すでに『ビブリオテーク・ブリタニク』誌に発表された『人口論』の仏語抄訳を読んだマルサスが、プレヴォによる翻訳を高く評価していること等を記している。

われわれにとって興味深い点は、この叙述に続くくだりであり、それはプレヴォが「最近の事情から、私は、イギリスの救貧法に関連する議論の大部分を翻訳せずにはいられなかった。まず第一の理由は、やや特殊とはいえ、テーマが非常に興味深いものであったからであり、次にこの議論が議会の救貧委員会（comité de mendicité de l'Assemblée）に提案され、同委員会によって賢明にも否決された様に、軽率な模倣を警告するのに役立たせることができるからである。」¹⁵⁾と述べている点である。この時期にすでにプレヴォは、救貧法に関連するテーマに関心を寄せていたことが窺える¹⁶⁾。

ところで、プレヴォは1806年に発行された『ビブリオテーク・ブリタニク』誌31巻に「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」を寄せた。比較的長編のこの論文は、この時期のプレヴォの人口や貧困に関する見解を理解するうえで不可欠である。

この論文のなかでプレヴォは、マルサスの考え方を要約したうえで¹⁷⁾、人口増加を抑制す

刻も早くそれを実行したかった」理由として「単に私が著者や著作を評価しているからだけでなく、それが私の講義の一部分で私に手引き書を提供したからである」（*ibid.*, pp.vii-viii）と述べ、そこに付した注で1804年にジュネーヴのパシューから出版した自分の著書『哲学論集』を参照するよう指摘している。

15) Pierre Prevost (Traduit de l'anglois), *ESSAI SUR LE PRINCIPE DE POPULATION, OU Expose des effets passés de l'action de cette cause sur le Bonheur du genre humain ; suivi de quelques recherches relatives a l'esperance de guerir ou d'adoucir les maux qu'elle entraine*. Par T. R. Malthus, 1809. p.vii.

16) ただし、この短い序論の叙述のかぎりでは、彼が貧困や救貧法に対してどのように考えていたか、いかなる姿勢を取ろうとしていたかは明白ではない。委員会の「否決」を「賢明」だと表現する意味、あるいは「軽率な模倣」は何を指しているか、その「警告」は何に向けてのものか等も確認できない。そしてこの書の本文はマルサス『人口論』の翻訳であるから、これらの疑問を解く鍵は他の著述に求めるしかないであろう。

17) 「マルサス氏の人口論の最終的な結論は、貧者の結婚は奨励されるべきではない、ということである。その理由は、人口は生活の糧に依存するということである。というのは、人口はそれ自身、生活の糧よりもはるかに急速に増加する。したがって、人口は必然的に何らかの障害によって阻止され、その水準にとどまる。しかし、飢饉や戦争や疫病といった破壊的な障害は、致命的な惨禍として避けられなければならない。その諸前例が多くの分野で破壊的な力を発揮している悪習や窮乏が、さらに一層災いをもたらしている。したがって、貞節や社会的幸福と矛盾のない諸手段、すなわち子どもの境遇

る理由として以下の2命題を提示している。すなわち、

「人口は食糧に依存する。したがってその過剰を予防する必要がある」(Pierre Prevost, 1806. pp23-24.)。

プレヴォは、この2命題のうち第1のそれはよく知られているが、第2のそれはあまり主張されていないどころか、「幾人かの著者はどのような種類の障害でも人口に対立させるのは政策上の誤りであると考えているようにすら思われる」(*ibid.*, p.24.)とし、その一例としてルソー (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) を批判的に引き合いに出している。

ここでのプレヴォによるルソー批判は、ルソーが社会や政府の善し悪しの基準を単に人口の多さに還元しているという点にある。プレヴォは、「結論に注目するならば、ルソーは明らかに政府の良さの尺度を与えるものは数であって幸福ではない」(*ibid.*, p.27.)と指摘している。プレヴォの主張は、「幸福」が、あるいはその大きさと広がりこそが基準だという点にある。人口が多ければ良いということではなく、人々がどのような生活をしているか、その内容が問題だとプレヴォは考えているのである。同様の主張は、続けてミラボー (Mirabeau, Victor Riquetti, Marquis de. 1715-1789.) の『人類の友』(*L'ami des hommes, ou Traité de la population*, 1756-60.) に対してもなされている¹⁸⁾。

プレヴォは、この点でのルソー批判と同様に、人口こそが富であるとかその際限のない増加のみを称えることは誤りであるとミラボーを批判している。人々は愉楽を楽しむことがで

が確実ではないような結婚を思いとどまらせること、また近代国家においてそもそも人々が服するよう仕向けられる慎慮の動機を強めることによって、人口(増加)を予防する障害を効かせることが有効であろう。窮乏や悪習はそれらが最も普遍的な様相を帯びたものである。」(Pierre Prevost, 1806. pp23-24.)

18) プレヴォは次のように主張する。

「ミラボーはおおよそのところ『社会契約論』の著者と同じ見解を表明している。彼は、最大の情熱を込めて、敢えて不都合を問題にするようなことを望まずに、人口の利点を賞揚している。

『人間の友』(Ami des hommes)の序文の後、彼は、人間を広い視野からみたいと願い、人間に過度に多くのことを詰め込む計画に反対する卑劣な快楽主義者(épicurien)しかいないと考えているように思われる。この著作の第2章はこのフレーズで始まる。『人口がひとたび社会の第1の富として認められると、それはどこから引き出すのかとか、その種の富を得る手段を知ることが問題になる。』—この著者がそのタイトルに基づいておおいに賢明に答える問題は、生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知ることである。—しかしながら、それでもなお彼は富の第1に人口をおいている。もし社会的つながりが非常に多数の人間にとって窮乏の不変の原因にはならないことが期待されているとしても、戦い疲れてはならない誤謬。人口は疑いもなく非常に大きな富である。そして生活の糧と比較して遅くて漸進的なその増加は止められるべきではけっしてない。しかし、(『人口論』の著者がとてもしばしばたきこんでいるように)各人が生活することができ、そしてなおまず何らかの愉楽を楽しむことができるところで発展を止める必要がある。望ましい富として考慮されるべきものは、この愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福であって、不幸を運命づけられあるいは存在感を味わうことができる前に死に至る子どもの無制限な出産ではない。」(Pierre Prevot, 1806. pp.27-28.)

きなければならない。望ましい富は愉楽であり、実生活で求められる人々の幸福である。これがプレヴォの主張の第1の論点である。それだけではない。「生活の糧の尺度は人口の尺度であることを知らなければならない」。すなわち、人口は生活の糧の量に依存するのであって、その逆ではない。これがプレヴォの主張の第2の論点である。そしてこの点で、プレヴォはマルサスと軌を一にするのである。

さて、「マルサス氏の著作『人口論』により示唆された若干の考察」におけるこれ以降のプレヴォの叙述（脚注を含む）は、ガルニエ（Germain Garnier, 1754-1821）やセー（Jean-Baptiste Say, 1767-1832）等の議論が簡単に触れられている。それに対してJ. ステュアート（Sir James Denham Steuart, 1713-1780）に関してはやや詳細に論述されている。「おそらく他の著述家たちは、もはやそれに力点を置かなかつたし、ジェームズ・ステュアート以上に人口論に接近して来なかっただろう」（Pierre Prevost, 1806. p.32.）と彼は考えるからである¹⁹⁾。プレヴォがJ. ステュアートから引用している箇所は、まず、あらゆる階級の住民に結婚を勧めることに対する批判、子どもを養育することができない両親から生まれた子とその親の悲惨な結末に対する警告である。

このようにプレヴォは、この時期（19世紀初頭）にはマルサスの人口論を評価していた。マルサス以前の思想家や経済学者についても、マルサスにつながる叙述や論理を見出そうとしている。また彼は、マルサスに「敵対」したり、人口は食糧生産高に依存すること、食糧生産には限界があることから人口抑制が不可避であることを認めつつも、その対応策として死に至る病を持ち出したりすることに反対している。彼が求める人口抑制策は、「力強い、賢明な、徳の高い」解決方法であって、それで人口増加を「抑制するのに十分である」と彼は考えているのである。注目しておきたい点は、プレヴォの叙述には人々、特に貧者や労働者の貧困からの回避ないし脱却を目指す視点が随所に見られることである。マルサス『人口論』を称賛する背後に、プレヴォのこの立脚点・思想が垣間見えるように思われる。

しかしながら、ピエール・プレヴォの見落としてはならない主張点は、むしろこれ以降の時期（1910年代以降）に発表された論説等にある。これらの多くは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌とその後継誌『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌で展開されている。次節でそれらを検討する²⁰⁾。

19) プレヴォがここで対象にしているのは、J. ステュアート『経済の原理』（An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy, 1767. 仏訳 RECHERCHE DES PRINCIPES DE L'ÉCONOMIE POLITIQUE.）

第1編の第12章から第17章、すなわち人口増加（増殖・出産）およびそれと統治や階級それに農業生産との関係と、第21章の「第1編の要約」である。

20) 本節の詳細は、拙稿、2011を参照。

IV 『ビブリオテーク・ブリタニク』誌と「効用原理」

18世紀末からジュネーヴで、知識人たちが中心となって啓蒙的な雑誌が刊行された。『ビブリオテーク・ブリタニク』(*Bibliothèque britannique*) 誌である。同誌は1796年から1815年まで刊行され、1816年以降は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』(*Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts*) 誌に引き継がれた。

ジュネーヴでは1794年に武装蜂起が起きたが、すぐに崩壊した。かわって1796年に始まるナポレオンのイタリア遠征は、ジュネーヴをも次第に危機に陥れていった。1798年4月、ジュネーヴはフランスに占領され、併合された。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の創刊は、次第にフランスの脅威が増しつつあるジュネーヴで、それへの対抗として、共通の敵を抱くイギリスとの密接な関係を築くことによって、フランスへの抵抗を示す意図もあったのであろう。同誌がフランス統治の時期を通じて存在し続けたことは、同誌の編集者たちのフランスに対する抵抗精神の強さを象徴している。そして後述のように、この雑誌の編集者たちの思想は功利主義的であって、ジュネーヴの人々に対する啓蒙を意図した出版という性格もあったと言える。いわば同誌は、対外的な意義（フランスへの抵抗）と対内的な目的（啓蒙）の両面を併せ持つものだったのである。

この時期の出版事情として、教育を受けた大衆がより広範に増大するにつれて、彼らは新しい読者層を形成し、知識と視点、とりわけそれらを獲得するための定期刊行物の出版を求めたという。多くの出版者たちは、雑誌を作成するにあたって百科事典のような特性を要求し、広範な分野の出版物を網羅することを求めたと言われる。『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の内容も、自然科学・文学・思想・社会経済の多岐にわたっている。

フランス大革命の挫折によってジュネーヴからフランスが撤退するのに及んで、同誌は『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』に書名を変更した。それはもはやフランスへの抵抗を示す必要がなくなったからという理由だけでなく、復興期におけるジュネーヴ人のコスモポリタンな性格に符合するものである。

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、マーク＝オーギュスト・ピクテ (Marc-Auguste Pictet, 1752-1825) が1796年に、弟のシャルル・ピクテ (ド・ロシュモン) (Charles Pictet de Rochmont, 1755-1824) と友人のフレデリック＝ギヨーム・モーリス (Frédéric-Guillaume Maurice, 1750-1826) に呼びかけて刊行されたものである。さらに同誌には多くの協力者たち (collaborators) がいた。

ここで特に注目したいのは、前節でも取り上げたピエール・ブレヴォである。ルイ・オディエ (Louis Odier, 1748-1817) やシャルル＝ガスパール・ド・ラ・リーヴ (Charles-Gaspard

de la Rive, 1770-1834) とともに正規に報酬が支払われる協力者になっている。しかもプレヴォは、同誌の *Littérature* シリーズで登場する。前節で瞥見したように、まだ若年の頃から宗教、哲学、法学を学んだプレヴォは、青年期に物理学等の自然科学を学び、またその分野で多くの著述を残しているが、19 世紀初頭頃からは社会科学、特に経済学関係の著作も多くなっている。前述のように、プレヴォは「ジュネーヴにおける経済学の最初の教師だった」のであるが、それはジュネーヴ・アカデミーの教壇とともに、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌を舞台になされたと言うべきであろう。協力者のなかには、エティエンヌ・デュモン (Etienne Dumont) もいて、彼も *Littérature* で 6 編にかかわっているとされる点も、後述のように効用の原理の普及・啓蒙を目指すこの雑誌の編集者たちの意図や客観的役割が示唆される。

『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（その後継誌も含めて）の編集者たちや協力者たちの思想基盤はどのようなものであろうか。それは一言で言えば、「効用」と「道徳」である。同誌第 1 巻第 1 号（1796 年）序文に以下の叙述がある。

「効用の原理 (Le principe d' UTILITÉ)、これはわれわれの不変の羅針盤であるが、この原理はそもそも、すべての科学を同一線上に置くことを許さない。農業はわれわれの目から見ると第一線を占めている。また農業はわれわれにとって、第 1 の技術である。さらにそれは、とりわけ諸原理を広めることを思考する科学である。それは、イギリスやスコットランドのモラリストたちの諸著作において、貴重な教訓を秘めているものである。個人はこれらの哲学者以上に、正義の本能を発展させ開発し、人間の心の内に秘められたあらゆる気力が目指す、幸福の熱い全面的な期待を導いている。この著者たちの道徳は明解で純粹である。その特色は穏やかであり魅力的であり、おそらくけっして虚偽の哲学の過ちなど無く、彼らの人間性にとりつかれた悪は、もはや逆の毒を必要としないだろう。」
(*Bibliothèque britannique*, t.1, *Littérature*, (1796), pp.6-7.)

このように創刊号冒頭の序文で編集者たちは、効用の原理を「不変の羅針盤」として彼らの思想基盤を明確にしたうえで、イングランドやスコットランドの「モラリスト」と結びつけつつ、道徳あるいは正義について語っているのである。

さらに第 7 巻（1798 年）の序文で、それはより明瞭に記されている。ここでは改めて同誌の分類——*Littérature* と *Sciences et Arts*——の内容を説明しているが、そのなかの *Littérature* に関する叙述のなかで、「諸個人の幸福」とか、社会の「安寧と繁栄」について読者により大きな関心を持ってもらうために、この (*Littérature*) シリーズを設定したとしている²¹⁾。

21) 「科学や技術も農業も含まない内容全体を取って一言で示すならば、われわれは LITTÉRATURE より

さらにこの序文には、ベンサムを高く評価する叙述がある²²⁾。

そして次のパラグラフで、「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”」が同世代への適用と将来の世代の教育に強い影響を及ぼすものとして考察されねばならないと主張されているのである²³⁾。

この表現は、『ビブリオテーク・ブリタニク』や『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌の編集方針の思想基盤を明確に示している。

「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”」に関して、ふたつの面で注目しなければならない。ひとつは「自分自身と他人を幸福にする」ことが重要な事柄と捉えている

以上に適当な言葉を見出さなかった。われわれはわれわれが手中にしていた（掲載）内容の取捨選択を規定してきた動機に関して、またわれわれがこのシリーズにおいて、ほかでもないいくつかのテーマを重視した範囲に関して、われわれの読者に説明する義務がある。

一国の政治体制がどうであれ、すべての人々の歴史はわれわれに、宗教、法、習慣がその安寧と繁栄の最も確実な保証であることを証明している。われわれはそれらをまた、諸個人の幸福の主要な源泉として考えている。したがって、われわれが最も頻繁に読者諸君に立ち返ってくれるよう求めなければならないのが、社会のこの大きな関心事なのである。」(*Bibliothèque britannique*, t.7, *Littérature*, 1798, p.iv.)

ここでは、第1に安寧と繁栄のために宗教・法・習慣が最も重要な要素であるとしている点、第2に「諸個人の幸福」という課題を持ち出している点、第3に「諸個人の幸福」と（社会の）「安寧と繁栄」を結びつけている点に注目しておきたい。

- 22) 「精神の変化が全体として改革の方向に向けられる時代においては、市民法は、最も永く使用してきたものでさえ、改めて検討されなければならない。多くの著述家がそれに従事し、またその真っ最中である。ベンサム氏は、諸思想の賢明さ、深さそれに独創性の点で第一人者であると思われる。ロンドンに居を定めたわれわれの同胞のひとりで、この著者〔ベンサム（一引用者）〕とずっと以前から親しい関係にあった人物——この著者は自分の手稿類をこの人物に委ねたのであるが——は、その抜粋をわれわれに送りがついていたが、彼は再度われわれにそれを約束した。このコレクションのメリットは、職業上であろうと趣味のうへであろうと、これらの重要な内容を熟考するわれわれの読者に、見落とされることはないだろう。」(*ibid.*, p.vi.)

- 23) 「道徳、すなわち“自分自身と他人を幸福にする技術”は、われわれにはふたつの観点の下に考察されるように思われる。現在の世代への適用として、また教育によって次の世代に強い影響を及ぼすことに照らして。われわれがギズボーン、ファーガソン、デュガルト・スチュアート、アダム・スミス、アイキンの著作からとった抜粋は、生活というやっかいな道の、如何に優れた案内であるかを示しているに違いなかった。

しかし、単純な教訓（戒律）は弱々しく効くに過ぎないし、まれに成人たちに作用する。精神を鍛えることによって、いかなる情熱もかきたてないのなら、それは心を素通りするだろう。有効な効果を上げるために、モラリストは、一方では人は教訓（l'exemple）から強力な影響力が生じることにならうこの傾向と、他方ではあらゆる社会的徳を創造し活性化させる、そして名誉などもっていない、この同感を授けられる、そのような道徳本能において作用させることを求めているに違いない。なぜなら、好意、思いやり、慈善を語っても、それは不完全にしか示されていないからである。これらふたつの手段によって、現代の世代でさえ、多くのエゴイズムと無気力が打破られ、生き生きとして生産的な道徳を回復させてみることができるからである。（…）われわれは偉大な例を示す喜びに、有益な同感をかきたてる喜びに身を委ね、そしてこの喜びは裏切られなかったのであった。賛意と関心という貴重な証拠がわれわれの旅のこの部分を励ましたのであった。」(*ibid.*, pp.vi-vii.)

点である。自分自身だけではないし、他人だけでもない。これは換言すれば「多数の人々の幸福」である。他のひとつは、これを「道德」に置き換えている点である。すなわち、18世紀の道德哲学と（多数の人々の）「幸福」を結びつけているのである。この一節から、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者たちが、18世紀イギリス（スコットランド）の道德哲学を高く評価していることが理解できる。

道德哲学と効用原理の結合、その視点からの啓蒙、これが『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性であり、その背後にはフランスに対抗するジュネーヴの知識人たちによる祖国への熱い思いがあったように思われる。前述の『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の特性、すなわち編集者たちの立場は、同誌やその編集者たちへの有力な（と思われる）協力者のひとりであったピエール・プレヴォにも共通している。フランスからの独立後のジュネーヴで、前述のように『ビブリオテーク・ブリタニク』誌は、1816年から『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』へと誌名が変更された。それにもかからず、編集者たちと協力者であるピエール・プレヴォの基本的視点・見解は、変わっていないと思われる。「基本的」というのは、根底に道德と効用の原理を据えている点に変化は無いものの、社会・経済状況の変化によって論理の力点の置き方に進展が見られるからである。状況の変化のすくなくともひとつはジュネーヴの独立であるが、他のひとつは経済状況の変化、ナポレオン戦争終結後のいわゆる「過渡的恐慌」の経験であり、後者が前者以上に大きなインパクトを与えている。

前述のように、19世紀初頭のピエール・プレヴォは、『ビブリオテーク・ブリタニク』誌（31巻、1806）に寄せたマルサス『人口論』に関する考察では、マルサスに対する批判的言辭は見られない。むしろそこではマルサスを下敷きにしつつ、それに反した見解をとる（と、すくなくともプレヴォが理解する）ルソーが批判されている。そのうえでプレヴォは、生産量の増加を超える人口増加を如何に抑制するかを検討しているのである。これにたいして1816年の『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌におけるプレヴォは、生産量の増加に懐疑的である。このことを端的に（やや遠回しにはあるが）表しているのが、『ビブリオテーク・ユニヴェルセル』誌第2巻（1816）に掲載された、彼によるマーセット婦人（Jane Haldimand Marcet, 1769-1858）の『経済学問答』（*Conversations on Political Economy, in which the elements of the science are familiarly explained*, 1816）抜粋とそのなかに付された彼（プレヴォ）の注釈である。この抜粋記事の執筆者名は記されていない。しかし注釈の末尾にピエール・プレヴォのイニシャルが付されているところから、抜粋記事の執筆者がピエール・プレヴォであることはほぼ確実である。

その注釈を見る前に、それが付された本文自体の論述展開の流れを確認しておこう。この抜粋記事の冒頭で、プレヴォであろう筆者はまず、経済学とはいかなる学問であるかに触れ

ている。この点に関する『経済学問答』の記述にも触れ、また J. スチュアートの著作のタイトルに「経済学」(économie politique) という用語が用いられていることに触れつつ、筆者プレヴォは、J.-B. セーの「経済学は富を研究する科学である」とともに、「経済学は、富が如何に生まれ、広められ、消滅するか、その発展を奨励する理由、あるいは頹廢を引き込む理由、人口への影響、高い身分の能力、人々の幸福と不幸を示す」科学であると指摘し、また『経済学問答』のなかでは「マダム B」が「若い学生」との対話のなかで、この定義に追従して、「この科学はまさに、富や国家の繁栄を追求することを学ぶこと」であると述べている。

注目すべき点は、「マダム B」が社会の発展の現状、特にそ経済の現状を、富者と貧者の差別も含めて肯定的にみているのにたいして、学生「キャロライン」が不平等を引き起こすあらゆる悪は悲しいものだとは主張している点である。さらに学生「キャロライン」が貧富の差を悪だと主張し、また機械は労働者の雇用機会が失われ、人々から仕事を奪うと否定的に捉えていることに対して、「マダム B」は貧富の差は悪ではない、富者がいなければ貧者は餓死するし、貧者がいなければ富者は働くことを強制されるから、「富者と貧者はおたがいに必要」だと反論するとともに、さらに機械の発明・導入に話がおよび、学生が機械は労働者から雇用機会を奪うと否定的に捉えていることに対して、「マダム B」は、機械の導入が労働を節約し、商品価格の低下をもたらし、その結果需要が増加し、またそれに応じて生産も増加する、そこでこの分野では機械の導入以前よりもかえって雇用される労働者は増加すると指摘する。ここで興味深いのは、この対話とその結末に対して筆者プレヴォが注で疑問を投げかけている点である。

「ここでは諸結果を評価するために、他の科学では何回も成功した方法、極端に仮定をたてるという方法をここで適用されることはできないだろうか？ もしどの分野においても労働は最後には単純化されるとすれば、どうなるのだろうか？ すべての非常に短時間で、かつ非常に容易に生産され、需要は全体的に増加し、われわれが注釈を加えているテキストの論理に従うならば、生産物は需要に比例するだろう。そして仕事の単純化がなければ、より多くの労働者が活動することになるだろう。その結果、労働者の食糧、衣服、住居が改善されることになるのだろうか？ —多分。—何ら疑いもなく、富者はあらゆるもので満ち溢れているだろう。この豊かさのなかで、貧者の部分が現在よりも遙かに多数存在していたということは、あまり確実ではない。それはちょうど、印刷所の印刷工や綿織物工場の労働者が、手作業の筆耕者や手織り工よりも遙かに良く処遇されているということが証明されていないのと同様である。様々な形態で表現されるこの観察は、富の理論が形成されるとしても、幸

福の理論は作れないということを十分に示している。(P. P. p)」²⁴⁾

プレヴォは、たとえ労働者の雇用が増加しても、彼らの生活が向上してはいないことから『経済学問答』の対話を批判しているのである。その視点は、重要なことは人々の幸福が実現されているかどうかであって、単に富が増加すれば良いというものではない、ということである。

V シスモンディによる恐慌回避策の論理とその思想基板

本稿 I 節でみたように、シスモンディ恐慌論は、市場における消費（需要）の限定性を前提にしたうえで、諸生産者（諸資本）の市場をめぐる競争（信用制度がそれを増幅することも含めて）の結果としての全般的過剰生産として展開されている。ここで重要なことは、過剰生産が、市場における消費（需要）の大きさを事前に捉えることができない諸生産者（諸資本）が市場の状況を当然無視して生産し、結果的に市場の消費（需要）を凌駕する生産量が市場にもたらされ、それがさらに諸生産者（諸資本）の競争と信用によって加速されることで生じるのであるから、いわば再生産の内部に生じる要因で惹き起こされると理解されていることである。そこで、過剰生産の回避は再生産の外部要因によらざるを得ない。その回避策をシスモンディは、ここでも生産（供給）と消費（需要）の両面に求めている。すなわち、前者（生産（供給））の側面としては、政府による諸生産者（諸資本）間の競争の抑制であり、後者（消費（需要））は分配の平等化である。シスモンディは当然、再生産過程の安定的で順調な拡大を望んでいるし、諸個人の幸福を「愉楽」（jouissance）と表現してこれを願っていたことは確実である。しかし、彼は、スミスの時代とは違ってそれを市場メカニズムのなかで実現させることは不可能であると考えていた。

まず、生産の側面からの恐慌回避策に関してシスモンディは、生産の人為的・政策的抑制を主張する。彼は政府による生産抑制の必要性について、折に触れて言及している。就中、再生産過程の現実の態様を論じている『経済学新原理』第 4 編（「商業の富について」）では、市場をめぐる生産者間（諸資本金）の競争の結果惹き起こされる供給過剰の問題とともに、それに対処する政府の役割や期待が論じられている。例えば、

「政府は、生産を無差別に奨励するのではなく、盲目的な、そしてたいていの場合同国人に、あるいはすくなくとも他人に対して向けられた熱狂を押さえることに腐心しなければ

24) Pierre Prévost, *Conversations on Political Economy, etc. Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres, et arts, Littérature*. tome 2me, 1816, p.352.

ばならない」(N.P. tome I, p.341.)

とか、

「どんな観点から富の増進を考えるにしても、つねに同じ結果に到達する。富の増進が段階的に行われ、自ずから比例が取れており、どの部分も急激な歩みに従わないとき、それは普遍的な福祉を広く行き渡らせる。しかし歯車のひとつが他の歯車よりも早く動くと、たちまち苦境が生じる。われわれは、所得の形成よりも急速な消費から苦境が生じ、消費よりも大きい生産の結果として苦境が生じることをみた。われわれはいま、産業が必要上使用しうるよりも大きい資本を形成する節約から苦境が生まれることをみたばかりである。さらにまた大きい苦境は、労働需要を超える人口の増加の結果として生じる。いたるところで、各個人の活動は、機械の動きを早める傾向があるように思われる。おそらく政府の義務は、この動きを鈍らせ調整することにあるであろう」(N.P. pp.409-410.)

にみられるように、需要量を超過しがちな生産量の増大や蓄積を抑制するための政府の介入を求めているのである。

政府の役割の問題は、シスモンディがスミスとの相違を明瞭に主張する論点のひとつである。彼はスミスに対する評価や主張の相違点を『経済学新原理』の「はしがき」や第1編(「経済学の対象と起源」)等で述べている。そこではスミス経済理論は社会の進歩に大きく貢献したと高く評価しつつも、同時にスミスの学説から引き出される結果と実際の結果とは「しばしば正反対」(N.P. pp.50-51.)であると主張している。

「アダム・スミスの学説は、われわれのものである。彼の才能が学問の領域に掲げた光明は、彼の学派の人々に正しい道をたどらせ、以来われわれの成し遂げたすべての進歩は、彼に負うものなのである。」(N.P. pp.50.)

「この創造的天才に対するわれわれの深い畏敬の念とわれわれが彼から借りた学説の実際的な結果は、彼がそこから引き出した結果としばしば正反対であるように見えること、また諸原理自体と、彼の理論が多かれ少なかれ実施されてきた半世紀の経験とを結びつけてみると、多くの場合そこからまったく、異なった他の結論が出てこざるを得ないことが論証できる。」(N.P. pp.50-51.)

シスモンディは、スミスが自由競争によって富が増大すると主張することは一面では正しいし、それによって富者が一層富裕になるとしている点もあたっているとみる。しかしながら、それだけでは真に国民が富裕になったとは言えないのであって、「富の分割を調整し、これを公平にする」(N.P. pp.51-52.) ことによって、初めて国民(シスモンディは「人口」(population)と表現する)を豊かにしうる——これがシスモンディの主張である²⁵⁾。

25) 「アダム・スミスは、富しか考えず、それを持つものは誰でもその増大に関心を持つとみて、あらゆる

シスモンディは、富の増加のみに注目するスミスを批判する。ひとつの論点は、上述のように富の増加を追求するあまり、諸生産者（諸資本間）の競争が激化し、経済の混乱・恐慌を惹き起こすことであり、それを回避するための政府による競争抑制介入である。もうひとつの論点は、シスモンディがスミスを批判する際、「富との関係と同様に人口との関係で考察する」と指摘している点である。これが、シスモンディがスミスを批判する中心的で根源的な（とシスモンディが考える）点である。彼は『経済学新原理』の末尾に近い章（第7編第8章）で以下のように論じている。

「われわれが展開してきた見解とアダム・スミスが述べた見解とのあいだの主要な相違が認識され得たことであろうが、その相違は、スミスが国富の増大に関わるすべてのものについて政府の介入を絶えず排斥したのに対して、われわれはしばしばそれを要請したということである。スミスは、最も自由な競争が各生産者に可能なかぎりの低価格で販売することを余儀なくさせ、その結果、各消費者に彼の購買に関しての最大の節約をさせることを可能にするということを原理として確立した。彼は富を抽象的に、それを享受すべき人間と関係なしに考察したのであって、この体系においては、可能なかぎり多量に生産し、それを可能なかぎり安価に販売することによって、前者によって所得が増加させられ、後者によって社会の支出が減少させられるだろうと彼が結論づけたのも、おそらく当然であった。／最も完全な競争は、必然的にこれらの結果のいずれももたらすに違いない。しかし、経済学を富との関係と同様に人口との関係で考察するならば、最大の富裕を与えることではなく富裕によって人々に最大の幸福を与えることが求められたならば、初めのうち希求されたことでさえ躊躇されざるを得なかった。できるだけ多く労働し、できるだけ安価に売することは、まさに求められているこの富のすべての利益を断念することであり、苦痛を増大させて愉楽を奪うことであり、市民を奴隷にすることであって、その結果は、国民貸借対照表を計算する人に、より多くの金額を勘定に記入させるという光栄に浴させ

個人的利益の自由な追求に社会を委ねること以上に、富の増大にとって好都合なことはあり得ない、と結論づけた。彼は政府に向かって言った——私的富の総額が国民の富を形成する。さらに一層富裕になろうと努めない富者はいない。彼をなすに任せよ。彼は、自分自身富裕になることによって国民を富裕にするであろう。われわれは、人口との関係のなかで富を考察した。富は人口を養わなければならない。一国民は、単に資本の増加だけでは、富裕を増大するとはわれわれには思えなかった。ただ資本が増大するにつれて、それが養わなければならないはずの人口に、より一層の富裕を広めたときにのみ、富裕が増大するように思われた。……われわれは、新しい生産によってであれ、富者が自分の富を増大させることができるのを見た。そして、われわれは、この富の分割を調整し、それを公平にする（rendre equitable）ために、アダム・スミスが排撃した政府の干渉をほとんど絶えず要請しているのである。われわれは政府を、強者に対する弱者の保護者、自分自身で自分を守ることのできなかったものの守護者、各個人の一時的な、だが冷静な利益の代表者、代弁者でなければならないとみなすのである」（N.P. pp.51-52.）

るに過ぎないのである。」(N.P. tome II, pp.336-37.)

ここで「人口」(population)という言葉が意味する内容に注意しなければならない。これは、例えば一国に居住する人数ということではけっしてなく、一人ひとりの国民を指しているのである。引用文後半のパラグラフにあるように、「経済学を富との関係と同様に人口との関係で考察する」とことと、すぐこれに続く「最大の富裕を与えるのではなく富裕によって人々に最大の幸福を与えること」と言い換えている。前段の「富との関係」に対応する言葉が後段の「富裕」であり、「人口との関係」に対応する言葉が「人々に最大の幸福を与えること」である。つまり、「人口」とは最大の幸福を享受する「人々」＝国民一人ひとりなのである。この点がシスモンディが最も強調したかった点であることは、彼の著作のフル・タイトルが『経済学、すなわち人口との関係における富に関する新原理』となっていることから明らかである。また、「国民」と言わずに「人口」と表現したのは、マルサスの影響があったからと推測される。19世紀初めというこの時代は、マルサスの『人口論』に如何に向き合うかは、最大の論点のひとつであったからであるし、それだけではなく、前節で見たように、シスモンディが師と仰いだピエール・プレヴォは、マルサスの『人口論』に関して関心を抱き、また論じていたこともシスモンディに影響していると思われる。

本節冒頭でも述べたように、シスモンディは恐慌回避策を生産（供給）と消費（需要）の両面に求めている。前者(生産(供給))の側面としては、上述のように政府による諸生産者(諸資本)間の競争の抑制、すなわち経済への政府の介入である。

もうひとつの消費（需要）の側面としては、「分配の平等」の主張がある。

所得分配のあり方に関してシスモンディは、平等な分配は市場を拡大、すなわち消費（需要）を拡大すると考えている。少数の富者に巨額の所得が集中するよりも、多数の人々が適度に裕福な状態にあって、ほどほどの所得を獲得している方が、社会全体の消費（需要）総量が多い。この点に関するシスモンディの主張には、いくつかの論点が絡み合っている。その絡み合いを解きほぐすと、みつつの論理があることが分かる。

シスモンディは『経済学新原理』第4章「商業の富について」で以下のように述べている。

「10万リーブルの所得が、ただひとりの人間に帰属するにせよ100人の人間に帰属するにせよ、つねに等しい消費に充てられるであろうことは、確かに真実である。しかし、この消費は、同じ性質のものではない。きわめて豊かな人間も、貧者よりはるかに多くのものを自分のために使うことはできない。しかし彼（富者（引用者注））は、はるかに良いものを用いる。彼（富者（引用者注））は、はるかに高価ではるか遠方から取り寄せられた材料で作られた、はるかに高級な製品をほしがる。まれにみるほどの熟練した手で少ない仕事を仕上げる労働者の上達を特に奨励するのは彼であり、これらの労働者に法外な賃

金を支払うのも彼である。これらの労働者は、蓄積されて国富の一部をなすことのあり得ない、つかの間の愉楽をしか得させないという理由で、われわれは彼らを不生産的と呼んだのだが、彼らに特に褒賞を与えるのもまた、彼である。／ 裕福な 100 家族は、多分もっといいパンと肉とを食べたであろうし、もっといい葡萄酒、あるいはもっといい国産のビールを飲んだであろう。そしてそれによって国の農業を奨励することになったであろう。彼らはまた、国内で製造されたもっといい織物を身にまとったであろう。彼らは、たくさんの衣類を持ち、着替えの下着を十分備えることに贅沢を見出したことであろう。こうして彼らは、国内の製造業を大いに奨励したことになるであろう。」（N.P. pp.358-9.）

ここでのシスモンディの論理を要約すると以下のようになる。すなわち、社会全体として 10 万リーブルの所得があるとすれば（貯蓄は度外視する）、それがどのように分配されようが、社会全体の消費総量は金額タームとしては同一である。しかし、その消費内容（物量タームとして）は異なる。所得が「ただひとりの人間」に帰属する場合には、「高価」で「遠方から取り寄せられた」（すなわち外国から輸入された）材料による「高級な」財を消費する。これは、限られた数の労働者によって生産されるに過ぎない（多くの労働者の雇用には結びつかない）し、「つかの間の愉楽」をこの「ただひとりの人間」にもたらすだけであって、国内生産を促すものではなく、再生産の拡大に結びつくものではない。そもそも、金額タームとしては多額になるとしても、それはより高価な高級品の消費によるものであり、物量タームでは増加はしない、その意味で「不生産的」である。一方、「ただひとりの人間」ではなく「裕福な 100 家族」ならば、国内生産物の物量タームでの消費増大（それは金額タームの増大にも反映される）を通じて、国内の製造業の拡大をもたらすであろう。

ここでは「遠隔地」（海外市場）と消費の質（使用価値）の論理も混在する形で議論が展開されているために論旨がやや不鮮明であるが、要点としては、富（所得）の偏在は消費総量を減少させる、ということであり、金額タームと物量タームの使い分けの論理である。10 万リーブルを金額タームでみれば、それは富者によって消費（需要）に充てられようが、あるいは貧者によってであろうが、10 万リーブルの支出であることには変わりはない。しかし、物量タームで見れば、ひとりの富者で支出される場合と多数の裕福な人々によって支出される場合とは異なり、前者の場合は少量（高価なもの）にとどまるのに対して、後者の場合は多量（比較的安価なもの）になる。

しかしながら、このような金額タームと物量タームの使い分けの論理とは異なる論理も展開される。別の箇所では以下のようにも述べている。

「大規模耕作が小規模耕作に変わって現れたとき、おそらく、より多くの資本が土地に吸収された。以前よりも多くの富が農業者全体に分配されることが可能となった。しかし、

富裕な借地農業者1家族の消費に貧しい日雇い労働者50家族を合わせたものは、国民にとって、誰ひとり豊かではないが誰も適度な裕福さを失っていない農民50家族の消費に及ばない。同様に、都市では、必要最低限に抑えられた1000人の労働者をその指揮の下に労働させる、百万長者の工場主ひとりの消費は、国民にとって、それほど貧しくはない労働者をそれぞれ10人労働させるに過ぎない、それほど豊かでもない製造業者100人の消費には及ばない。」(N.P. pp.357-58.)

さらにシスモンディは、「以前は100家族のあいだに分配されていた所得を全部吸収した豊かなただひとつの家族が、土地と製造業に対して、100家族のうち99家族がもはや消費しなくなった分全部を埋め合わせるのではなければならない」(ibid., p.360.) が、それは不可能だと主張する。すなわち、非常に豊かな1家族と非常に貧しい99家族からなるグループと、適度に裕福な100家族からなるグループを比較した場合、後者の方が消費総量が多いが、それは、適度に豊かな100家族は、その所得を衣食住の消費に充てるが、非常に貧しい99家族は消費量が限られているし、その不足分を非常に豊かな1家族の消費でも及ばないからである、とシスモンディは考えているのである。

このようにシスモンディは、社会総体の消費量が限定されていることを示す論理として、富の偏在(不平等な分配)がその社会に存在する場合、消費量そのものが富の偏在がない状態と比較して少ないと主張する。

社会総体の所得総量を前提としたうえで、「非常に貧しい99家族」の所得が少ない分、「非常に裕福な1家族」の所得が多ければ、社会総体としての消費総量は同一ではないか、との議論が可能であるかもしれないが、この点に関してシスモンディはふたつの論点から否定している。ひとつは、富者は所得が多い場合、海外からの高級輸入品を購入する傾向があるから、国内生産物の消費は限定されてしまうという論理、他のひとつは、人間の欲求には限界があって、所得が多いからといって消費量を無限に増大させることはしないし、できないという論理である。前者は論外に置くとしても、後者は重要な論点と関連する。シスモンディは以下のように述べている。

「労働する人間の欲求は必然的に著しく限られている。社会全体の力を出せば、労働生産力の驚くべき増加によって、人間の衣食住はやがて満たされてことになったであろう。」(ibid., p.77.)

また、これにすぐ続けて以下のように述べている。

「国民のすべてが死力を尽くして生産を行ったら、国民が消費するよりも10倍も多い衣食住を生産することになり、それによって各人の分け前は多くなるどころか、逆に各労働者は例えば10を売らなければならないのに、買う必要があるのはただ1だけでし

かない、という事態が生じ、各労働者にとって、それだけ売れ行きは悪くなり、それだけ購買し得なくなる。」(N.P. pp.77-78.)

人間の欲求は限られているのであるが、それを無視して生産すれば、生産物の売れ残りが生じて所得が減少し、そのことがさらに消費の減退につながると考えられているのである。人間の欲求が無限ではないこと、これが消費総量(需要総量)を限定するひとつの論理である。

人間の欲求が限られていることが社会全体の消費(需要)総量の制限となっていることを、シスモンディは繰り返し述べている。『経済学新原理』第4編「商業の富について」の第1章「商業体制における国民的繁栄」でも、生産(供給)量と消費(需要)量の多少をについて語る際に、「商業の富が、その形成を促す欲求と比例してしか増加しないあいだ」とか、あるいは「資本が消費欲求を上回っているとき」と表現して、消費の限界を画する要因として「欲求」を挙げている²⁶⁾。

さらにもうひとつの論理がある。それは、「社会の富」はすべて最終消費(個人的消費)に流れ込むという点である。前述のように、「社会の富」は「固定資本・流動資本・消費ファンド」から、すなわち再生産に必要な資本と人々の個人的消費からなっているが、それらはいずれも「消費」に結実するのであって、「固定資本」や「流動資本」が最終消費から自立して拡大することはないと認識されている。

「三種の富(固定資本、流動資本、所得=消費ファンド)が一様に消費に向かって進むことに注意するのは、きわめて重要である。なぜなら、創造されたものはすべて、欲求を充足して初めて人間にとって価値があるからであり、その欲求は消費によって初めて満たされるからである。」(N.P. p.127.)

このように、シスモンディの消費(需要)制限論はみつつの論理の組み合わせになっている。ひとつは、金額タームと物量タームを区別することによって、富が偏在(不平等な分配)している場合の消費制限を論証する論理、ふたつめは人間の欲求の限界の論理、みつつめが社会全体の生産は最終的に消費(個人的消費)によって決定(制限)されるという論理である。シスモンディはこれらみつつの論理を必ずしも整理して論述していない。章により扱うテーマが異なるにしたがって、使用する論理が異なっていたり、複数の論理を用いたりしている。しかし、社会総体の消費が限定されていることを主張していることには変わりはない。見方を変えれば、それぞれの章で扱う対象によって、それに応じたより適切な論理を使って消費(需要)の制限を論証しようとしている見ることも可能であろう。ただ、いずれの論理

26) フランス経済学の系譜における「欲求」「欲望」論については、米田昇平『欲求と秩序 —18 正規フランス経済学の展開』昭和堂、2005 年、および同『経済学の起源 —フランス 欲望の経済思想』京都大学学術出版会、2016 年が参考になる。

でも、あるいはこれらみっつの総合として、消費（需要）の制限ないし限界が主張されているのである。重要なことは、そのような「限界」は、不平等な分配によって増幅されと考えている点である。これが経済の実態のなかで顕在化したものが、恐慌の発生であると考えられているのである。したがって、シスモンディが考える消費（需要）面からの恐慌回避策は、分配の平等化となる。

シスモンディの恐慌論は、以上みてきたように、生産（供給）と消費（需要）の両面から展開されており、各々の処方箋として、政府による競争の制限と分配の平等化が不可欠となる。

さて、このようにシスモンディが消費（需要）の制限を議論するとき、「非常に裕福な家族」の消費が「適度に豊かな 100 家族」の消費には及ばないのは、人間の欲求には限界があるからだとの主張は是としても、なぜシスモンディは「人間の欲求」やその「限界」を引き合いに出すのだろうか。換言すれば、シスモンディ恐慌論の一側面である社会の消費総量の論理に、「人間の欲求」という論点を持ち込む点がその特徴なのであるが、それは彼のいかなる考え方（思想）から発しているのだろうか。

それは、シスモンディの思想の根源に「効用の原理」があるからである。「効用の原理」は、シスモンディ経済学のみならず、政治学においても基底をなす思想である。そもそも、『経済学新原理』第1編「経済学の対象と起源」第1章「国政学の二重の目的」の冒頭でシスモンディは、次のように記している。

「国政学は、社会に結合した人間の幸福を目的とするし、しなければならない。国政学は、人間の性質と両立しうる最大の幸福を人間に保証する手段、と同時に最大多数の個人にこの幸福を分かち手段を追求する。政治学のどの分野も、立法者の努力すべきこの二重の目的を見失ってはならない。立法者は、人間が社会組織によって到達しうる幸福の度合いと、すべての人々がこの幸福に公平に参加することとを同時に配慮しなければならない。もし立法者が、.....特権的な存在の育成のみを目的にして少数者を同国人の上に立たせ、他のすべての人々の窮乏と没落を招くとすれば、やはり任務を果たしたことはないのである。」(N.P. p.00)（傍点は筆者）

冒頭のこの叙述は、シスモンディ思想の根底を理解するうえで、非常に重要である。彼はしばしば「愉楽」とか「欲求」を引き合いに出し、それらを論理の基軸に据えている。その思想の根源にあるのが、「効用の原理」である。また、前述のように、「愉楽」や「欲求」の大きさを基準に持ち出すことの根底に、「効用の原理」がある。これはまさに、前節まででみたシスモンディに思想的影響を与えた周囲の人々、ピエール・プレヴォや『ビブリオテーク・ブリタニク』誌の編集者や協力者たちからの影響であろうことは容易に推察できる。前

述のように、彼らは「効用の原理」を思想的基盤にして発言し、出版行動を取っていた。ジュネーヴだけではなく、広くヨーロッパ社会の人々を啓蒙し、社会の発展（政治的にも経済的にも）に寄与することをみずからの使命と考えていた人々の思想であり、社会実践であったのである。

シスモンディは、そのような思想を経済学体系の基軸に据え、現実には生じている恐慌を理論化し、その克服の道を経済学として見出す論理として、『経済学新原理』をまとめ上げたのであった。

おわりに

シスモンディの経済学は、単純な過少消費説ではない。従来、そのような謬論の根拠として取り上げられた『経済学新原理』の箇所は、経済不均衡、あるいは恐慌を論じた部分ではなく、順調な経済発展を、均衡を維持しつつ経済成長を実現する姿を論じたものであった。シスモンディ経済学体系は、そのような均衡論と現実には生じている恐慌の原因と克服策を論理的に解明する不均衡論の二重構造からなっている。前者（均衡論）は後者（不均衡論）の理論的基礎と位置づけられるし、理論的であり、その意味で抽象的である。それに対して後者はより具体的であり、前者をベースにしつつも経済の現状を直視し、その課題の解明と解決策を示すことに注力されている。

その不均衡論がシスモンディの恐慌論なのであるが、それは、生産（供給）面と消費（需要）面の両面から展開されている。生産（供給）面では生産者（諸資本）の競争とそれを促進する信用の役割が、消費（需要）面では欲求の限界と最終消費（個人的消費）が再生産規模を決定すること、そして何よりも不平等な分配の問題性が取り上げられている。そのうえで、恐慌の回避策として、生産（供給）面では政府による競争の制限等、経済への介入が、消費（需要）面では分配の平等化が主張されている。

このようなシスモンディ経済学体系のなかで、彼が最も重視した点は、「欲求の限界」と「分配の平等化」であった。一見、無関係に思える両者は、実は密接に関係しあっている。その真意を理解するためには、彼の政治・経済・歴史観の根底にある思想を確認しなければならない。

シスモンディ思想の特徴は明白である。それは、一言で言えば「効用の原理」である。前節でも指摘したように、『経済学新原理』の冒頭で指摘している「最大の幸福を保証すること」と「最大多数の個人にこの幸福を分かち手段を追求する」との指摘が、このことを端的

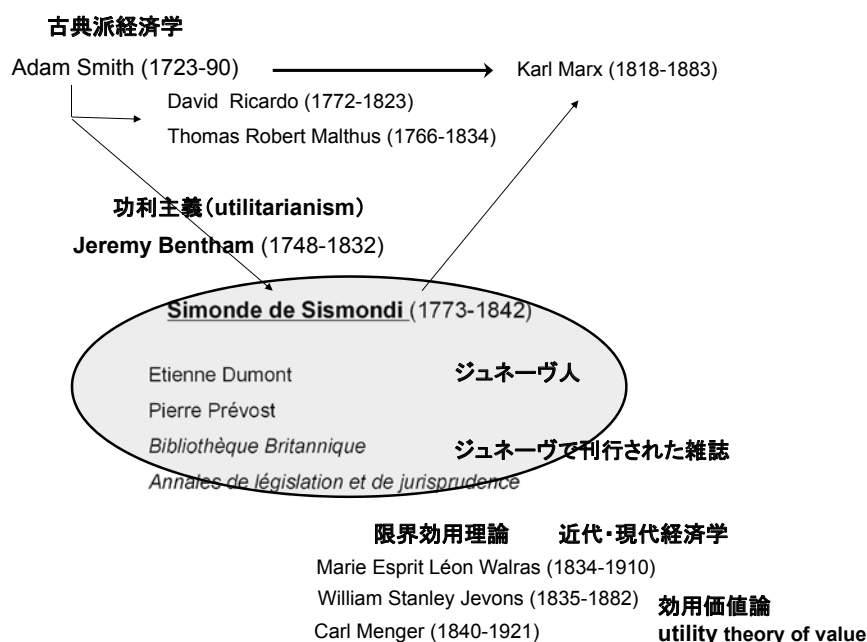
に示している。また、シスモンディは、折に触れて「愉快」や「欲求」を引き合いに出しているが、それらは「効用の原理」に基づく彼の経済学のキーワードである。

シスモンディの思想に「効用の原理」を植え付けたのは、ジュネーヴの啓蒙思想家たち、ピエール・プレヴォや『ビブリオテーク・ブリタニク』の編集者たちであった。シスモンディが、一家の亡命先であるイタリアのペーシャから家族を残して単身でジュネーヴに戻り、その後まもなく参加したコペのスタール夫人のサロンでの経験から、みずからの知的素養の弱さを痛感して獲得に努めた知見の提供者は、サロンに集った人々ともに、シスモンディの著作に高い評価の書評を寄せたスコットランドの啓蒙思想家、マッキントッシュであった。これらの人々とその思想から刺激を受けたシスモンディは、その思想の奥底に「効用の原理」を抱くことになった。

図1は、これらの理論的・思想的流れをまとめて図示したものである。

これらの人々との交流と前後して、『エディンバラ百科事典』の「経済学」の項目の執筆を依頼されたシスモンディは、1815年の恐慌を目の当たりにして、スミス経済学「修正」の必要性を痛感して経済学の「新原理」を執筆するが、彼の思想の根底にある「効用の原理」をベースにした経済学の「新原理」が誕生したのである。

図 1



参考文献

定期刊行物

Annales de Législation et de Jurisprudence, 1820-22.

Bibliothèque britannique, 1796-1815.

Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres et arts, 1816 —.

著作

小池 渺（1993-94）「シスモンディ研究序説 —シスモンディの生涯と彼の遺産—」（上）（下）（完）『関西大学経済論集』42巻6号、43巻3号、43巻6号。

———（1995-97）「ベッシャ町立図書館所蔵の『シスモンディ・コレクション』の成立過程」（1）（2）・（完）

中宮光隆（1997）『シスモンディ経済学研究』（三嶺書房）。

———（2004）「シスモンディとリカードの一接点」（熊本県立大学総合管理学会編『新千年紀のパラダイム —アドミニストレーション—（熊本県立大学総合管理学部創立10周年記念論文集）』）上巻。

———（2006）「シスモンディの経済思想とその由来」飯田裕康・出雲雅志・柳田芳伸編『マルサスと同時代人たち』日本経済評論社。

———（2009）「シスモンディと周囲の人々との交流の一齣」『アドミニストレーション』第15巻3・4合併号。

———（2010）「ピエール・プレヴォの生涯と業績」『アドミニストレーション』第16巻3・4合併号。

———（2011a）「ピエール・プレヴォにおける道徳哲学と経済学」『アドミニストレーション』第17巻3・4合併号。

———（2011b）「『ビプリオテーク・ブリタニク』誌とピエール・プレヴォ —効用原理と道徳哲学—」『アドミニストレーション』第18巻1・2合併号。

———（2012）「ピエール・プレヴォとシスモンディ —経済思想における功利主知的要素—」『アドミニストレーション』第18巻3・4合併号。

米田昇平（2005）『欲求と秩序 —18世紀フランス経済学の展開』昭和堂。

———（2016）『経済学の起源 —フランス 欲望の経済思想』京都大学学術出版会。

Candolle, A.-P. de, (1839) *Notice sur M. Pierre Prévost. Professeur émérite à L'Académie de Genève. (Tiré de la Bibliothèque universelle de Genève. Avril, 1839.)*.

O'Leary, Patrick (1989) *Sir James Mackintosh: the Whig Cicero*.

Prévost, Pierre (1806) QUELQUES REMARQUES suggérées par l'ouvrage de Mr. MALTHUS sur le PRINCIPE DE POPULATION, *Bibliothèque Britannique, Litterature* vol.31.

——— (1808) *ELEMENTS DE LA PHILOSOPHIE DE L'ESPRIT HUMAIN, Par Dugald STEWART. TRADUIT DE L'ANGLAIS Par Pierre PREVOST*.

——— (1816) *Conversations on Political Economy, etc. Bibliothèque universelle des sciences, belles-lettres, et arts, tome 2me, Litterature*.

Salis, Jean-R. De (1973. (Réimpression des éditions de Paris, 1932)) *Sismondi 1773-1842, t. I, La vie et l'œuvre d'un cosmopolite philosophe, Genève*.

Simonde de Sismondi, Jean-Charles-Léonard (1819, 2e éd. augmentée, 1827) *Nouveaux Principes d'économie politique, ou de la richesse dans ses rapports avec population*, 2 vols.

——— (1837-38) *Étude sur l'économie politique*, 2 vols.

Winch, Donald ed. (2006), *Vindiciae Gallicae and Other Writings on the French Revolution*.